

八重瀬のシーサー

梗概 富盛は火事（がよく）出て部落民はたいへんこまっていた。スルメーという人は義村御殿から来たが「そんなに火事が出てこまっているからあなたがたは厄払いをなさい」と言われて久米に行って通しをやった。また八重瀬は火山（ヒーザン）であるからシーサーを造ってそなえない間は 火事が出るからとそれでシーサーを造ってジュリ城に八重瀬のシラオレーという所が火山（ヒーザン）であるからあそこに向けてシーサーをそなえた。そのシーサーをそなえつけた人は知念按司。そしてその時から富盛は火事が出なくなり部落民は安心して生活できるようになった。このシーサーはつくられているものを具志頭の海からあれは海石である。あそこからつくってもってきた。昔はマチグというものを知らないからシーサーの長さと同じにしてそなえつけて首カーセーしてあそこにもってきてある。そしてあとは女の人をのせて楽にのせることが出来た。

あらすじ 八重瀬町の勢理城（ジリグシク）に、石獅子が置かれたのはなぜだろうというお話をしますね。

昔、富盛ではよく火事が出るので、富盛集落の人達はとても困っていました。ある日、富盛に義村御殿から指導者がやってきました。スルメーという人が「そんなに火事が出て困っているのなら、久米村（くにんだ）に行って、そこで通しをやってみたら、治まるのではないか」と教えてくれました。スルメーの話を聞いた富盛の人たちは、さっそく久米村で通しをやりましたが、火事はなかなか治まりません。さて次は知念按司という人がやって、このように言いました。「八重瀬の山は火山なので、シーサーを置かないと火事は治まらないだろう」富盛の人たちは頻繁に出る火事をどうにか無くしたいので、言われた通りにシーサーを作ることにしました。作ったシーサーに棒と紐を備えつけて、首に紐を引っ掛けて具志頭の海から運んできました。知念按司が火事がよく出ている場所（八重瀬のシダワレー）へシーサーを向けて置いてみると、火事が出ることが無くなりました。それからは富盛の人達は安心して暮らしたそうですよ。

話者情報 1903（明治36）年生まれ 男性

記録日 1983年3月24日

分類 伝説